

中田かわら版 2 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

■人生百年時代に生きる<4>

「嫌なことは忘れ、くよくよせず前向きに」

95 歳の達人 中野 實さん 下村町内会



中野さんと文化祭の出品作品 (2022 11.6)

95 歳になった今も背筋がピンとして若々しく、会話を楽しみ、人を和ませてくれる人。それが中野さんだ。それに多種多才な趣味、技術の持ち主。国家試験をとった資格は 14 種に上る。多くは日本鋼管の現役時代、火力発電の 1 級ボイラーマンの時、取得したもので高圧ガス製造保安主任はじめ危険物取扱、消防設備士、玉掛技能などだが仕事を離れた現在、茶道（裏千家）や調理師のプロの腕前は健在だ。毎年お正月用に作るおせち料理は家族、親戚用のために作っている。元旦には大勢が集まり賑わうとか。その量は半端じゃない。みんなの嬉しそうな顔を見るのが中野さんの楽しみでもある。

またジオラマ作り 50 年は趣味の域を超え作品の一つ一つが輝いて見える。ある時、本職の大工さんが作った評判のジオラマを見に行き、その感想は「私のほうが断然よかった」。中野さんの実力のほどが分かるだろう。昨年 11 月、中田文化祭にはギリシャのメテオラにある「天空の修道院」のジオラマ（長さ 180cm×幅 45cm）を 1 年がかりで完成し出品した。

16 歳の時、特攻隊を目指し予科練に入隊。知覧（鹿児島）で訓練を受け敵艦決行の日を待つ。しかし時は敗戦濃厚。ヒコーキもガソリンもなく一度も飛び立つこともなく 17 歳の時、終戦を迎えた。国から支給された 200 円とわずかな衣服を抱えて九州・大分の実家に帰る。幸い近くに別府温泉があり旅館で働くことができた。やはり土地柄か、日本舞踊、茶道、モダンバレエなど稽古場や教室があり、迷わず踊りとバレエを始めた。ある時、石井 漢率いるバレエ団が公演にやってきた。幸運にも石井氏の紹介もあり上京し晴れて入団。「くるみ割り人形」を大舞台上で踊った芸歴もある。日本舞踊は藤間流の名取、茶道は裏千家と立派な肩書を持っている。

その後、日本鋼管に入社し 35 年間勤務。ここでも中野さんがチャレンジしたのが調理師の資格だった。仕事の後、夜間学校に通い見事卒業した。中野さんの話を聞いていると「人生楽しいことばかりではないが、そう悪いものでもない」という気分させてくれる。経験を多く積んだ先輩の包容力なのかも知れない。今、私たちは中野さんから美味しい料理をごちそうになったり、戦争体験を聞いたり、ジオラマを頂いたり恩恵にあずかるばかり。懐の大きな中野さんから深い人間力と生きる知恵の伝達を頂いている。



95 歳の誕生を祝う会でケーキにナイフを入れる中野さん

宮田貞夫＋小山芳美

～一人ひとりが CO2 を減らす努力をし、美しい地球を子どもたちに残そう！～

■「中田のむかし話」<1>

マッカーサーの井戸の由来

元泉区歴史の会会長 宮本 忠直著

<はじめに>

「中田むかしの話」は宮本忠直氏が生前に書かれた中田郷土史の冊子。御霊神社宮司、第31ボーイスカウト団委員長のほか「泉区歴史の会」の会長を長く務める。昭和・平成・令和と三代にわたり多くの郷土史の編纂や執筆の傍ら青少年の健全育成、地域の文化・歴史の継承と発展に貢献、昨年3月31日逝去。氏の偉業を偲ぶとともに、中田に遺された貴重な歴史誌から中田という「歴史の街」の魅力を知ってもらえたらと思う。



井戸の由来が書かれている看板

(宮田貞夫)

この井戸をマッカーサー井戸と呼ばれるのは次の理由がある。それは昭和20年8月に第二次世界大戦が終わり、連合軍最高司令官のマッカーサー元帥が日本に進駐するため、8月30日、日本海軍の厚木航空隊基地であった現在の厚木基地に降り立った。有名な「厚木進駐」である。マッカーサーらの日本進駐の第一夜の宿は横浜の「ホテル・ニューグランド」であった。そのため彼は大勢の部下を従えてこの長後街道を横浜へ向かった。一行は八百仲商店の前で一休みをした。その時に彼らはこの井戸の手動ポンプを使って水を汲み、マッカーサー元帥をはじめ兵隊たちが代わる代わる美味しそうに飲んでいたという。今流行りの危険管理意識の全く感じられない話であるが、その頃は未舗装であった長後街道は、列をなしたジープや軍用トラックの舞いあがる土埃で、先も見えない程だったろうから、或いはうがいの水に供したのかも知れない。



元「八百仲商店」があった場所
中田北2丁目(現スペースアップ泉店)

この井戸があった場所は、むかし江戸幕府の告知板である「高礼場」が置かれた場所であった。また長後街道と交差する南北に通じ中田寺に向かう道は、古くからこの地域の主要道であった。

<編集部調べ>

「マッカーサー一行の足取り」

厚木基地—渋谷町長後—厚木街道の十字路を左折—戸塚に入り国道1号線を左折し保土ヶ谷へ。保土ヶ谷警察署を通過し洪福寺を右折、浜松町交差点を左折し直進。生糸検査所を左折して海岸通りに出てニューグランドホテルに至る。全長24km。厚木出発午後2時20分、ホテル到着は午後4時だった。

(「神奈川県警察史」より)

編集後記

季語 春隣 (はる・となり)

「隣」という文字で、触れられるほどの近さを表し、

冬の終わりに春の訪れを感じることを指す言葉です。ふくらみはじめた草木の蕾などから近づく春を感じる場面で生きる季語です。もうすぐ節分。寒さでかたまっていた肩を開き元気に始動したいものです。

小島 敏子

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本 正

編集委員；山木重樹、小島敏子、田中進、河内満明、松本純子、佐々木弘美、鈴木賀津彦、嶋 宏之